

聖書の無謬性と神のみことば

高村 敏 浩

一 序論

聖書との関係において神のみことばとは何であろうか。聖書の本質と權威に関する問題は二〇世紀の北アメリカのルーテル教会を悩ませ、結果として、ルター派は二つのグループに分かれることとなった。一つは、神のみことばと聖書を同一視し、聖書の全体の無謬性を主張するグループ。もう一つは、聖書を神のみことばの一つの意味や形態として理解し、キリスト教の信仰に関する事柄においてのみ誤りが無いと主張するグループである。本論文は、二〇世紀北アメリカのルター派の聖書理解の歴史的展開を、重要な神学者、文書及び出来事を見ながら一九八八年のアメリカ福音ルーテル教会の形成に至るまで辿る。本論文の第一の目的は、日本のルーテル教会

の同僚たちに聖書に關するこの問題を紹介することである。

二〇世紀北アメリカのルター派について、エリック・グリッチ Eric Gritsch はこう言っている。「聖書の權威と教会の一致という二つのルター派的な問題が、繼續して議論と論争の元となった。」⁽¹⁾「聖書をどのように理解するかという問題は、今日アメリカ福音ルーテル教会（以下、ELCA）を形成しているルター派諸教会だけでなく、ELCAとルーテル教会＝ミズーリ・シノッド（以下、LCMS）の一致をも阻害した。實際、この問題は一九七〇年代にLCMSを二分する分裂を生んだ。このように、聖書の權威の理解はELCAとLCMSにとって二〇世紀の大半を費やしてきた中心問題としてあり続け、今日もなお重要な問題である。それにも拘らず、ELCAとLCMSの宣教パートナーである二つのルーテル教会——日本福音ルーテル教会（以下、JELC）と日本ルーテル教団（以下、NRK）——が協力して教育を行う日本ルーテル神学校においてこの問題が取り上げられることはほとんどない。これは興味深いことである。

今日ELCAを形成するルーテル諸教会によつてはじめられたJELCと、LCMSによつてはじめられたNRKにとつて、それぞれがどのような聖書理解を背景として持つのかを知ることが重要であろう。⁽²⁾私はJELCの牧師として、JELCの同僚にこの問題をはじめて、もしくはあらためて紹介し、どのようなことが神学的に問題となっているのかを牧師、また教会として確認することを望む。だから、ヘンリー・アイスター・ジェイコブス Henry Eyster Jacobs から始め、JELCに影響を及ぼしたであろう人物や考え方、文書に注目して行くことは相応しいことであろう。

二 用語の定義

まず初めに、この論文において無謬性という用語をどのような意味で使うのかを定義する。無謬性とは、すべての事実が明らかにされるとき、最初に書かれた状態および正しく解釈された状態において聖書は全く真実であり、その陳述するすべて——それが教義か倫理、また社会的・物質的・生命科学に関わることであろうとも——において誤りがないということである。⁽³⁾ただし、本論文で触れる神学者や文書は、この用語を無誤性や聖書根本主義、逐語靈感説などの他の用語と交換可能なものとして使っている場合があることは忘れてはならない。また、ときに無謬性は、ただ単に誤りがないという意味で、つまりもつと軽い意味で扱われることもある。しかし、この用語がどのような意味において用いられているかは、その用語が現れる文脈から判断できる。それは、ほぼすべての場合においてこの用語が修飾表現を伴い、その意図するところが限定されているからである。

北アメリカのルター派は、聖書の無謬性に関して二つのグループに分かれた。無謬性を支持するグループと、支持しないグループである。この問題は重要であつたため、二つのグループの間には対立的な緊張があつた。結果として、二つのグループはそれぞれ、相手に否定的な意味合いを持つ名前を付けて呼んだ。根本主義や保守主義、進歩主義や自由主義などである。しかしながらこの論文では、対立から生じる偏見を避けるため、次のような語句をもってそれぞれのグループを指すこととする。古ルター派 the Old Lutheranism と新ルター派 the New

Lutheranism である。前者は無謬性を支持するグループ、後者は支持しないグループである。しかしながら、神学者や神学的な文書が書かれた当時の状況とそこに働く意図を尊重して、引用する文書などにおいてはこれらの言葉は使われたときのままとする。

三 ヘンリー・アイスター・ジェイコブス Henry Eyster Jacobs

現在の JELC は、当時日本で宣教活動を行っていた異なるルーテル教会の協働と合併によって一九六三年に成立した⁽⁴⁾。これらの教会は、アメリカ・ルーテル教会（以下、LCA）やアメリカン・ルーテル教会（以下、ALC）。ただし、その多くは福音ルーテル教会（以下、ELC）からの宣教師、そしてフィンランド・福音ルーテル協会（以下、LEAF）の宣教の働きと密接な関係にあった。多くのルター派教会は第二次世界大戦後に日本にやって来たが、LCA と LEAF は戦前から活動していた。LCA は、最初は一八九二年から南部一致シノッド（USS）として、一九一八年以降は北米一致ルーテル教会（ULCA）として活動し、多くの宣教師を派遣、古日本福音ルーテル教会の形成と成長に、経済的、物質的、および霊的に寄与した⁽⁵⁾。

初期の宣教師の中には、チャールズ・L・ブラウン Charles L. Brown、I・S・G・ミラー L. S. G. Miller、エドワード・T・ホーン Edward T. Horn など、フィラデルフィアのマウント・エアリー神学校で学んだ者もあった。ブラウンは、セイラムのロアノーク大学での学びを終えた後、フィラデルフィアに来た。彼は一八九八

年に卒業し、教職按手を受け同じ年に日本に到着する。ブラウンは、その神学部が後に日本ルーテル神学校になる九州学院創立に尽力した。⁽⁶⁾ミラーはロアノーク大学で学び、一九〇七年に神学校を卒業して按手を受けた。彼は一九〇八年から日本で働き、第二次世界大戦の期間を除く一九二〇年から一九五二年まで九州学院の主事を務めた。⁽⁷⁾ホーンは、一九〇七年にミュンヘンバーク大学、一九〇八年にイエール大学、一九一一年に神学校を卒業した。彼は一九一一年に来日すると、日本ルーテル神学校の第二代校長として一九二九年から一九四一年まで働いた。⁽⁸⁾

彼らは皆、一八九八年から一九一一年の間にフィラデルフィア神学校を卒業した。そのため、彼らはヘンリー・アイスター・ジェイコブスの影響を色濃く反映した神学教育を受けたはずである。ブラウン、ミラー、ホーンは皆、古JELCの成立期にあつて重要な役割を果たした。⁽⁹⁾ミラーとホーンは特に、神学生や神学生になるうという学生たちの教育に長期にわたり、また深く関わったので、戦前、戦中、戦後も含め、古JELCで指導的な役割を担った日本人ルーテル派牧師たちにジェイコブスの神学的影響があつたであろうことは容易に推測できる。さらに言えばジェイコブスは、古JELCを支援したULCAにおいて中心的な神学者であつた。そのような理由から、一九〇五年に出版され、彼の「強い信念の成熟した表現」とされる *A Summary of Christian Faith* から、ジェイコブスの聖書理解を紹介することとする。⁽¹⁰⁾

ヘンリー・アイスター・ジェイコブスは、一九世紀末と二〇世紀初頭にかけての北アメリカ大陸における最も影響力のあるルーテル派神学者の一人であつた。彼は一八八三年から一九三二年まで、まず教授として、次に学部長として、最後に校長（学長）として、フィラデルフィア・ルーテル神学校で奉仕した。⁽¹¹⁾

ジェイコブスは、組織神学の前提の一つを次のように挙げている。

啓示の誤りのない記録としての聖書。

新約聖書は、言葉と行為とにおいて明らかにされたキリストの啓示、及びその啓示から聖霊の導きによって派生する真実と原則の誤りのない記録である。旧約聖書もまた同様に、明白でしばしば繰り返されるキリストの証しと権威、キリストの受肉前にその準備および部分的な啓示として与えられたことの誤りのない記録である。⁽¹²⁾

彼は、旧約聖書の誤りのない性質について次のように言う。「旧約聖書の正典は、キリストに関するすべての準備および部分的な啓示の誤りのない inerrant 記録である。」⁽¹³⁾確かにジェイコブスはここで、聖書に関して無謬性 inerrancy という語を使っている。しかし彼はこの語を、旧約聖書においては暗示され約束されたキリストという文脈の中で、新約聖書においては啓示されたキリストの文脈で用いている。言い換えれば、ジェイコブスは聖書の無謬性を、救いに関することにおいて適用しているのである。

それに対して、ジェイコブスの同時代人であり LCMSS の主要な神学者の一人であるフランシス・ピーパー Francis Pieper は、その著作 *Christian Dogmatics* の中で言う。

靈感は、聖書の部分だけ、たとえばその主要な事柄や教理、その他著者に知られていなかった事柄などにつ

いてだけではなく、聖書全体に働いているのである。……聖書は私たち人間にキリストについての知識、つまりは救いをもたらす。しかし同時に、聖書に見られる歴史的な資料（なぜなら、神のみことばは人間の歴史に介入したからである）は、たとえそれが意図的ではなく言及されたに過ぎなかったとしても、靈感を受けていて誤りが無い。なぜなら、それは聖書の一部だからである。⁽¹⁴⁾

ピーパーはこの著作において、聖書に関する神学的な問題に一五〇ページ以上も費やしている。それに対してジェイコブスの場合は二〇ページにも満たない。ピーパーの *Christian Dogmatics* が書かれたのは一九二〇年ごろであるが、ピーパーは聖書全体の無謬性と無誤性について教えていたに違いない。そして、ジェイコブスがそれを知っていたと推測することは決定的外れではない。しかし、ジェイコブスはピーパーの教えに拒否も同意も示しておらず、彼の読み手に、LCMS が支持するような無謬性の立場に立っていたのかという疑問を残す。ジェイコブスが問題の重大さを理解し、大衆には明らかにされていない理由によってこの問題に明確に触れなかったという可能性は十分にありえる。

ピーパーは当時の神学の問題を、「現代神学が初期の教会やルター、そしてルター派の組織神学者たちのうちに見つける主要な誤りは、彼らが聖書を神のことばと『同一視』しているということである」と説明する⁽¹⁵⁾。ジェイコブスはしかし、聖書を神のことばと同一視していたのであろうか。C・ジョージ・フライ C. George Fry とジョン・M・ドリッカマー John M. Drickamer は、今日のミズーリ・シノッドやウイスコンシン・シノッドと同じ聖書の権威の理解を有する二〇世紀初頭のルター派神学者の代表としてジェイコブスを位置づけようと試み

る。彼らは、ジェイコブスが聖書の教義について挙げる四つの理解の中に、聖書を神のことばと同一視するものがあるとする。⁽¹⁶⁾しかし、聖書を神のことばと「同一視」することは必ずしも、これら二つの古ルター派シノツドが保持するような意味においてジェイコブスが聖書の無謬性を支持していたということになる必要はない。それよりもむしろ、ジェイコブスがその著作 *A Summary of Christian Faith* の完成のために、息子のチャールズ・マイケル・ジェイコブス Charles Michael Jacobs の協力を得ていたことの意味を考える方が重要であろう。チャールズ・マイケル・ジェイコブスは、一九二七年にフィラデルフィア神学校の校長として行った就任演説において次の言葉を残した。「しかし……私たちが聖書に置くすべての重要性にも拘らず、私たちは聖書を神のことばと同一視はしない。⁽¹⁷⁾」

ヘンリー・アイスター・ジェイコブスは、聖書の性質と權威とに関してとても高い理解を持っていたと言える。しかし同時に、彼自身が明らかにしなかったため、ジェイコブスがどの程度まで聖書の無謬性を支持していたかを判断することは難しい。⁽¹⁸⁾しかしながら、彼は救いに関する事柄に関する限りにおいては、聖書の無謬性を認めていたと言うことはできる。

四 一九一〇年から一九四〇年

——ミネアポリス・テーゼ Minneapolis Theses『短い声明』 Brief Statement『ボルティモア宣言』 Baltimore Declaration

二〇世紀初頭、アメリカのプロテスタント諸教会において大きな運動が出現した。根本主義である。ジェームス・エコルズ James Echols は次のように言っている。「一九一〇年を最初に、根本主義の神学的内容を集合的に定義する一連の小論文がアメリカに現れた。『根本的な事柄』として知られる小論文は一二冊に及び、……それらすべてにおいて、暗にか明白にかの違いはあるものの、聖書の無謬性の教理が擁護されていた。⁽¹⁹⁾」根本主義の登場は、北アメリカのルター派に自分たちの聖書の本質の理解を明瞭にどう定義すべきかという問題を突きつけることになった。

聖書は、根本主義者たちが主張するように神のことばなのか、それとも、現代人が言うように神のことばを内包するに過ぎないのかという疑問を突きつけられたとき、多くのルター派信徒は、根本主義者たちと同様に、聖書は神のことばであるという考え方を擁護した。彼らにとって聖書は逐語的に靈感を受けており、結果として、無謬だったからである。⁽²⁰⁾

エコルズによると、「一九一〇年から一九四〇年までの三〇年の間、聖書根本主義は北アメリカのルター派の中に強力に存在した。⁽²¹⁾」エコルズは聖書根本主義という言葉で、聖書はその原テキストにおいてその主張することもしくは事実——科学的、歴史的、神学的——に、「聖書の最も優先されるべき目的はキリストを証しすることであるという認識があるにも拘らず」、誤りが無いという理解を示す。⁽²²⁾これが古ルター派である。古ルター派

は、ルターと一七世紀のルター派神学者たちへの神学的傾倒のうちに彼らの理解への支持を探し求めた。聖書の無謬性を支持する他のクリスチャングループと比べて、これこそ彼らの独自性であると言える⁽²³⁾。

一九一〇年から一九四〇年に、北アメリカのルター派たちは他の北アメリカのルター派諸教会との交わりと実際の一致の可能性を積極的に求めた。E・クリフォード・ネルソン E. Clifford Nelson によれば、一九三〇年ごろ、北アメリカのルター派は重大な転機を迎えた。それ以前の数十年は、異なるルター派教会の一致は特に民族的背景に見られる社会的、文化的要因によって阻害されていた。「しかし一九三〇年代に入ると、そのような非神学的な要因は退行し」、変わって神学的な問題がもっと重要な位置を占めるようになった⁽²⁴⁾。

ネルソンが言うように、ルター派の告白文書を受け入れることによって、自分たちをルター派と見做すすべての教会は福音の教理の信仰の告白において一致している。しかし、「答えの出ていない疑問は、信仰告白における一致が、神学的な統一性を求めるのかということであった」⁽²⁵⁾ある教会は、アウグスブルク信仰告白第七条を持ち出して否定的に答え、またある教会は、「信仰告白における一致は神学的な統一であり、神学と実践において同意が得られなければ教会の一致はあり得ないと主張して」、肯定的に答えた⁽²⁶⁾。

有機的な教会の一致を求めて、北アメリカのルーテル諸教会は、神学的な問題における同意に至ろうとした。言うまでもなく、その中でも特に難しい問題の一つであったのは、聖書の性質と権威の理解である⁽²⁷⁾。そのような試みの中で、三つの重要な神学的声明が出された。それらは、一九二五年のミネアポリス・テーゼ、一九三二年の『短い声明』、そして一九三八年のボルティモア宣言である。

ミネアポリス・テーゼは、アイオワ・シノッド、オハイオ・シノッド、バッファロー・シノッドおよびノル

ウェーアメリカルーテル教会の神学的合意である。この合意から、ALC（古ALC、the Old ALC）とアメリカルーテル協議会（ALCはその構成教会団体）が形成された。第一テーゼ——聖書に関するものである——は次のように主張する。

これらの合意条項に調印したシノッドは、新旧約聖書正典の全体、またそのすべての部分において神によって靈感を与えられ、啓示され、誤りのない神のことばであるということを例外なく受け入れ、信仰と生活に關するすべての事柄における唯一の無誤的な權威であるとする。⁽²⁸⁾

リチャード・C・ウォルフは、アイオワ、オハイオ、バッファロー各シノッドとノルウェーアメリカルーテル教会が、ULCAとシノッド協議会（LCMSはその構成教会団体）との中道を目指したとする。しかし、聖書については、彼らの理解は明白に古ルター派であった。⁽²⁹⁾

古ALCとの親密な関係を求め、一九三三年にLCMSは自分たちの神学的立場を『短い声明』としてまとめた。最初の三節が彼らの聖書理解に関するものである。最初の節では、彼らは聖書を神のことばと同一視し、無条件の逐語靈感説と、結果として聖書の無謬性を主張する。「聖書は神のことばであるから、言うまでもないことだが、誤りや矛盾を持たず、しかしその部分と言葉すべてにおいて、また歴史的、地理的、そしてその他の世俗的な事柄についてまで誤りのない真実を内包する。」⁽³⁰⁾これら二つの節において、彼らは聖書がキリスト教の教えと教理のすべての唯一の源泉であり、そのため、「すべての教師と教理が検査され判断されなければならない

唯一の規範と基準」であり「信仰の規範」であると主張する。⁽³¹⁾そして三節では、自分たちに反論する教えを拒絶することによって彼らは自分たちを次のように定義した。

私たちは……聖書がそのすべてにおいて神のことばではなく、しかし部分的に人間の言葉であり、そのため、もしくは可能性として、間違いを内包するという教理を拒む。私たちはこの間違った教えを酷く、不敬虔なものとして拒む。なぜなら、それは明白にキリストと聖なる使徒たちに矛盾し、人間を神のことばの裁定者として立て、結果的にキリスト教会の土台と真理を転覆させるからである。⁽³²⁾

『短い声明』の中で表明されたLCMSの立場は、古ALCに比べてさらにもっと明白に古ルター派である。彼らの言葉の選択は、読み手に再解釈の余地を残さない。LCMSと古ALCは決して講壇と聖卓の交わりを持たなかったが、彼らは聖書を含む声明の中で表現される神学的事柄においては合意に至った。⁽³³⁾一九七三年には、LCMSはこの声明文書を受け入れることによってその神学的な立場を再表明した。

一九三八年のボルティモア宣言は、その発表によって「北アメリカのルター派の主要な三つのグループ——シノッド協議会、アメリカルターテル協議会、ULCA——が一致するために不可欠な問題が誤解することさえ不可能なほどに明らかにされたため」に重要である。⁽³⁴⁾ボルティモア宣言は、ULCAの「神のことばと聖書に関する宣言」であり、その宣言において、ULCAは古ALCともLCMSとも異なる自分たちの立場、新ルター派としての立場を明確にした。⁽³⁵⁾

第五条にはこうある。

私たちは、キリストによって成就した人間に対する神の啓示のすべては……信仰のうちに、そのみを通して私たちのところへと来られる聖書に記録され、守られてきたと信じる。私たちはだから、彼の啓示と私たちの救いに関する事柄すべてにおいて聖書を誤りのない神の真実として受け入れる。私たちはまた、聖書は現在とこれから来る未来においてもまたご自身を顕かにする神の啓示であると信じる。そして神が聖書を通してご自身を継続して顕かにされているため、私たちは聖書はまた神のことばであると信じるのである⁽³⁶⁾。

ULCAは、聖書は神による啓示であり人間の救いに関する限りにおいて誤りがないと主張し、古ALCやLCSなどの古ルター派を明白に拒んだのである。

この文書は神のことばの異なった意味についても語っている。神のことばの最も重要な、もしくは「本物の」意味は福音、イエス・キリストの生と死と復活において顕かにされた神の救済的愛である。第三条は、次のように言う。「私たちは、聖霊が福音を通して人間へと来て、その信仰を目覚めさせ、強め、聖い生き方へと導くと信じる。……この理由のゆえに、私たちは神のことば、もしくは福音を、恵みの手段と言うのである⁽³⁷⁾。」この最後の部分は、その意味することにおいて重要である。なぜなら、書かれているように神のことばを恵みの手段と言うことは確かにあっても、「誰も聖書を指してそのようには言わないからである。」⁽³⁸⁾しかし、聖書はその読み手と聞き手とを福音へと導く。「聖書は、その中心である御子への神の証しである。……聖書は神のことば、神が

私たちをキリストにおける信仰へと導く手段であり……私たちの信仰においては私たちがその証しを神ご自身のものと見るのである。⁽³⁹⁾」

これらの文書が示すように、一九一〇年から一九四〇年の間、北アメリカのルター派はその聖書の理解において古ルター派と新ルター派に二分され、その大多数がプロテスタント根本主義のそれに似た、もしくは同一の無謬性を支持していたのである。

五 チャールズ・マイケル・ジェイコブス Charles Michael Jacobs

ボルティモア宣言は、ULCAが古ALCとの一致を目指す試みの中から生まれた。この宣言の背後には、ヘンリー・アイスター・ジェイコブスの息子であるチャールズ・マイケル・ジェイコブスの神学があり、古ALCとLCMSからULCAを区別するものであった。事実、フィラデルフィア神学校の校長という立場とULCAにおける積極的な神学的な関わりを通して、C・M・ジェイコブスは北アメリカのルター派内の聖書根本主義に對して、彼が信じるところの本物のルター派の聖書理解を明らかにし、また弁護したのである。ジェームス・K・エコルズは、そのC・M・ジェイコブスについての研究の中で、ジェイコブスが深く関わるボルティモア宣言が、一九八八年にELCAの形成においてその聖書の神学的理解を導く役割を果たしたと主張する。⁽⁴⁰⁾ここでは、ジェイコブスが北アメリカのルター派に紹介し、推し進めた重要な神学的な問題のいくつかを見ていくこと

とする。

C・M・ジェイコブスは、最初は教授として、次に父親を継いで校長として、フィラデルフィア神学校で二五年働いた。セオドア・タッパート Theodore Tappert によれば、「ジェイコブス教授はエアランゲン大学神学部と宗教改革の神学の復興に深く影響を受けた。」⁽⁴¹⁾ エコルズは、エアランゲン学派の聖書の権威理解の特質を次のようにまとめる。「救済史がキリスト教の伝統の中心であり、聖書は神の救済の歴史の権威ある証しである。」彼らは聖書の権威は救済史を通して顕かにされる救いの真理を証しすることのうちにあり、結果として信仰の事柄を超えての聖書の無謬性や無誤性を否定する。⁽⁴²⁾

エアランゲン学派はまた、批評的もしくは科学的な聖書の研究に対して好意的であった。C・M・ジェイコブスは彼らの学問的姿勢を受け入れ、聖書批評学を用いることを支持した。エアランゲン学派とC・M・ジェイコブスに共通するのは、「ルター派の神学を歴史のおよび科学的発達に見合ったものとする」という意図である。⁽⁴³⁾

C・M・ジェイコブスは聖書を、人間の文学であると同時に神の啓示であると理解した。聖書批評学は、前者の意味において聖書を理解する助けとなり、聖書の後者としての意味を証明も反証もしない。⁽⁴⁴⁾ この強い確信は、彼の聖書の権威理解についての歴史的発展の研究およびルターへの解釈における必須事項の研究から来ている。

C・M・ジェイコブスのルター研究は、ルターが聖書自体、聖書のメッセージ（内容）、そして最も大事なことであるが、福音という三つの意味で神のことばを使っているという理解へと彼を導いた。ルターにとって福音は、「神の恵みを信頼する罪人を義と宣言する神の行為を意味する。」⁽⁴⁵⁾ 当然のこととして、ルターは聖書を読むにあたってその宗教的価値を判断する解釈の基準を使っている。それは、聖書が私たちにキリストを提示するの

かということである。なぜなら、「聖書が私たちにキリストを提示するとき、たとえそれが間接的であっても、聖書は私たちの心（魂）において日々の奇跡を働く神のことばを、私たちに運んでくるからである。」⁽⁴⁶⁾ テイモシー・ウエンガート Timothy Wengert が言うところの「キリストを押し出すもの」 was Christum treibet ⁽⁴⁷⁾である。C・M・ジェイコブスは、ルターにとって、つまるところすべてのルター派にとって、この was Christum treibet という解釈の鍵が聖書の權威の源泉であり土台であり、聖書根本主義者たちが主張するような聖書の無謬性ではないとするのである。⁽⁴⁸⁾

C・M・ジェイコブスは一九三八年三月に死去した。しかし、すでに見たように、ボルティモア宣言はC・M・ジェイコブスの神学を反映している。C・M・ジェイコブスは新ルター派の学者であり、新ルター派を代表する人物と見られている。⁽⁴⁹⁾ 彼の存命中、C・M・ジェイコブスに従う新ルター派神学者の小さなグループがあった。そしてその忠実さのゆえに、北アメリカのルター派における彼らの影響力を増していった。

六 新ルター派 The New Lutheranism

北アメリカの古ルター派と新ルター派の区別は、1920年以降においてのみ有効かもしれない。それ以前には、聖書の性質と權威の問題について北アメリカのルター派は必ずしも二分されていなかった。「二〇世紀初めまでに、すべてのルター派は信仰告白の理解を支持する立場を明確にした。」⁽⁵⁰⁾ ヘンリー・アイスター・ジェイコブス

の例が示すように、神学者たちは聖書の無謬性に関する彼ら自身の立ち位置をはっきりさせることを避けるか、無関心であるかであった。

二〇世紀の半ばにはしかし、特に聖書批評学との関係において聖書の性質と權威の問題は避けることができなかった。「福音に忠実であろうとする」ルター派は、二つの選択肢から選ぶことを迫られているように感じた。「(伝統的なローマカトリック教会やプロテスタント根本主義がそうしたように) 正統主義的な聖書理解に戻すか、ルター派告白文書を諦めるか」という選択肢である。⁽⁵¹⁾ 彼らの多くは、「逐語靈感に基づいた無謬性を支持する立場から自分たちの関係を完全に切ることができず」、結果として古ルター派のグループとなった。⁽⁵²⁾ ここに、古ルター派が伝統的なルター派正統主義の流れの中に存在していることが明らかにされる。

しかし、少数の神学者たちは、異なった結論に至った。新ルター派である。ネルソンは次のように書いている。

しかしULCAの神学校の幾人かの教授たちは、ルター本人が彼らを正統主義から解放し、キリスト中心で救済論的な聖書理解へと導いたとする。聖書の權威は、その無謬性ではなく、歴史やイスラエルの人々、そして最終的にはイエス・キリストにおける神の自己啓示に関わる神のことばというその宗教的なメッセージに根拠を持つのである。⁽⁵³⁾

ネルソンによれば、一九三〇年までにULCAの神学教授たちの多くは「聖書の無謬性に関する『正統主義的』な教えは実際のところルター派的でも正統主義的でもないということを表明した。⁽⁵⁴⁾」ネルソンが「正統主義」と

正統主義——鍵括弧の有る無し——によって何を伝えようとしているのかははっきりしないが、重要な点は、新ルター派の神学者たちが自身のルター研究によって、聖書の權威に関する問題を解決しようと努めたこと、彼が理解しているということである。

一九世紀ヨーロッパは、ルターと彼の神学に対する新たな関心を示した。一八二六年からエアランゲン版『ルター著作集』が編纂され、ルター研究の発展に寄与した。⁽⁵⁶⁾一八八三年には、ヴァイマル版『ルター著作集』の第一巻が刊行され、その他の巻も続々と出版された。ヴァイマル版はエアランゲン版よりもはるかに優れたものとして理解され、ルター研究の標準テキストとなつていった。それまで出版されることのなかったルターの初期の文書の発見とともに、ヴァイマル版はルター研究、特にルターの初期の研究の発展に影響を与えた。⁽⁵⁶⁾多くの学者がルターの著作を直接手に取れるようになったことが、ルター・ルネッサンスというルターの神学の研究運動を引き起した。⁽⁵⁷⁾エアランゲン学派はこの新しい研究の中心地の一つとなるが、すでに見たように、C・M・ジェイコブスはこの学派に大きな影響を受けた。⁽⁵⁸⁾ジェイコブスは、ルターの著作から主要なものを選んで英語に翻訳し、ルターの神学を彼のアメリカの同僚たちの手に入るようにした。⁽⁵⁹⁾

北アメリカにおいては、「ルター研究は二〇世紀の最初の十年のうちにはじまった。⁽⁶⁰⁾」ルター神学の研究は、ルター派正統主義の伝統を過去のものとして前に進むようと、新ルター派の神学者たちを勇気づけたかもしれない。そのような傾向の最初期のものは、二〇世紀への変わり目のフィラデルフィア神学校に見られるようである。正統主義神学者から数多く引用するハインリッヒ・シュミット Heinrich Schmid の『福音ルーテル教会の教理神学』 *The Doctrinal Theology of the Evangelical Lutheran Church* は、一九世紀後半に神学校で用いられ

た教科書であった。ヘンリー・アイスター・ジェイコブスは、チャールズ・A・ヘイズ Charles A. Hay と共にこの本を翻訳しているので、この本が神学校の教科書として使われたとする推測は妥当であろう。H・E・ジェイコブスはしかし、彼自身でまとめた教義学の本を出版する。一八九四年の *Elements of Religion* と一九〇五年の *A Summary of the Christian Faith* である。シュミードの本とジェイコブスの *A Summary of the Christian Faith* それぞれの聖書について書かれた部分を比較してみると、読者はすぐに両者の違いに気付く。それは、前者がルター派正統主義神学者たちに主張の根拠を求め言及しているのに対して、後者は減多にそうしないばかりか、代わりに聖書への直接の言及を行っているからである。ジェイコブスが、彼の生徒たちに英語で信仰の父祖たち、つまりルター派正統主義神学者が告白し表現するものを伝えようとしていることに疑いの余地はない。しかしジェイコブスはそれを、過程ではなく完成形として、もしくはその要約を教えることによってなそうとしているのである。⁽⁶¹⁾ その意図するところは明瞭である。読者は、ルター派正統主義神学の伝統の影響やその重要さに気付かなくなるということである。

新ルター派の、ルター派正統主義神学に対するこのような態度は、古ルター派と対照的である。すでに述べたように、古ルター派はルター派正統主義神学の伝統に忠実である。フライによれば、「正統主義神学」は、それ以降のすべてのルター派神学の源泉であり、五〇〇年近くもルター派神学の主要な流れとしての責任を担ってきたのである。⁽⁶²⁾ フライやそのほかの古ルター派神学者にとって「ルター派正統主義の父祖たち」は、聖書的に信用でき、理性的に一貫性があり、感情的に満足させ、社会的に重要である、ルター派の神学の方法を確立したのであり、そのために、この方法は解釈の道具として機能し、神学のガイドとなるのである。⁽⁶³⁾ ルター派正統主義

へのルター派のこの傾倒は、一九五〇年代に出版されたフランシス・ビーバーの *Christian Dogmatics* においてあらためて確認された。⁽⁶⁴⁾

二〇世紀初頭にはじまったルター研究は、少なくとも二つの要因によって活発になった。一つは、新正統主義神学や弁証法神学と呼ばれる神学的な運動の存在である。しかしネルソンによると、アメリカのルター派の多くが、当初、居心地の悪い立場に自分たちを見出したという。

彼らは、「新正統主義神学」の宗教改革的な強調点に対しては感謝をもって反応したが、歴史批評を用いた聖書の研究方法や教会一致運動の重要性、また特にラインホルド・ニーバーによって提唱されたキリスト教が果たすべき社会的および公の責任については不安を感じていた。事実、ドイツの新ルター派やスウェーデンのルンド派にルター・ルネッサンスの実りとして同じような理解や考えが現れはじめたことを知ることによって、アメリカのルター派たちは新しい神学に対して肯定的な態度を取るようになった。⁽⁶⁵⁾

ギンター・ゴスマン Günther Gassmann は、新正統主義神学がその源泉 *ad fontes* として持つ宗教改革的な信念が、アメリカのルター派のうちにルター研究に対する新しい興味を掻き立てたとする。⁽⁶⁶⁾

二つ目の要因は、一九五〇年代にはじまったアメリカ版『ルター著作集』五五巻の出版である。これによって、古ルター派と新ルター派両者は、それ以前よりもっと包括的なルターの著作に英語で触れることができるようになり、結果として、自分たち自身でルターを研究するという道を拓いた。

古ルター派と新ルター派の違いは、方法論の部分にも見られる。一方で、古ルター派はその伝統への深い傾倒のゆえに、正統主義神学のレンズを通してルターを読んだ。他方新ルター派は、ルター派正統主義神学の批判的な評価へとつながる自由で直接的な格闘を通してルターを読み、解釈した。ネルソンが、聖書の無謬性の問題について、ULCA系神学校の教授たちがルターによって解放されたと言うとき、彼はルター派正統主義に立脚した解釈法を用いず、直接ルターにあたる研究が増えて行ったということを示唆しているのである。^⑦新ルター派のうちC・M・ジェイコブスなどの神学者に率いられたULCAのグループは、アメリカのルター派たちに、正統主義神学の復権かルター派告白文書の放棄以外の三つ目の選択肢とともに、聖書批評学の挑戦を示したのである。

七 一九四〇年代

ミネアポリス・テーゼ、『短い声明』、ボルティモア宣言の発表後、北アメリカのルター派は聖書の権威と性質の問題と格闘し続けた。アカデミアにおけるこの格闘・葛藤は、ジョセフ・シトラー Joseph Sittler の1948年の著書 *The Doctrine of the Word: In Structure of Lutheran Theology* におこつて見られる。

シカゴ大学の、そしてシカゴ・ルーテル神学校の教授であったシトラーは、聖書理解と彼のルター派正統主義に対する批判においてC・M・ジェイコブスに従った。シトラーは聖書の権威についてのアメリカのルター派の変化を認めているが、彼のフィリップ・ワトソンからの引用がそれを示す好例である。

ルターが、「地上には聖書以外キリスト教の正しさを証明する証拠はない」(WA 10:1, 80:16f)と言うとき、自分や他の人たちが、聖書が言っているのだから、聖書にあることを単純に、またすべて信じなければならぬと主張しているわけではない。……ルターにとって、すべての権威は最終的に神のみことばであるキリストのみに属する。そして聖書の権威でさえも、キリストを証しし、みことばの手段としての働きの限りにおいてのみ認められる、二次的であり派生的なものなのである。⁽⁶⁸⁾

シトラーは、ルターが聖書と神のみことばの神聖かつ救済的な出来事とを同じものとしては理解していないと信じていた。なぜなら、「ルターを解放したのはただの本ではない！それは生きた神」だからである。⁽⁶⁹⁾しかし、ルター派正統主義など宗教改革以後の神学者たちはこの神のみことばの理解を見失い、結果として、彼らのスコラ的方法論によって聖なる啓示を「ただの本」にしてしまったのであった。⁽⁷⁰⁾シトラーにとってはしかし、ルターの大胆な神のことは理解の喪失の責任は、ルター派正統主義だけでなく、ルター派敬虔主義にも同様にあった。前者は、神のことは客観化してただの本にすることによって、後者は、神のみことばの創造する力を過少に評価し、主観的な確信に立脚することによってそうしてしまったのである。⁽⁷¹⁾

シトラーのルター派正統主義の評価とルター派独自の聖書解釈論の回復が必然であるという主張が公正かについては、議論の余地がある。しかし、彼の著作は少なくとも、変化しつつあった当時の神学の風潮を明確に示している。⁽⁷²⁾シトラーや他の多くの神学者にとって、聖書研究に聖書批評学などの科学的方法論を用いないというこ

とは考えられないことであつた。そしてだからこそ、古ルター派は否定される必要があつたのである。⁽⁷³⁾

八 一九五〇年代から一九七二年

一九四〇年代、シトラーはこの問題と葛藤した。それは数十年に亘つて問題であり続け、神学者たちにチャレンジを提示し続けた。この問題は、一九五〇年代後半、アイオワ州デコラのルーサー大学で起きた事件において明白になった。今日最も影響力のあるルター派神学者の一人であるロバート・ジェンソン Robert Jensen がこの大学で雇われたとき、それは目に見えるかたちになった。当時教鞭をとり始めた彼は、神学校を卒業したばかりであつた。彼は当時のことをこう振り返る。

物事はうまく行かなかつた。私の想定外の歴史批評学的聖書解釈、進化論についての心配の欠如は、学生たちにとって危険と判断され、宗教学部による他の学部を取り締まる活動への参加の拒否は、先に述べた保守的な知識人たち、私を招聘した人たちや学部長を務めている者にとって棘であつた。⁽⁷⁴⁾

反ジェンソンのキャンペーンが張られ、それは宗教学部と生物学部の全教授の辞職による退陣という結末を迎えた。⁽⁷⁵⁾ 一九六〇年から一九六六年の間、ジェンソンは宗教学部と哲学部とを立て直すことに力を傾けた。この努力

は、*Theological Perspectives: A Discussion of Contemporary Issues in Lutheran Theology* という本という形として実を結んだ。

この本には、やはりルター派の主要な神学者であるゲルハート・フォルディ Gerhard Forde の聖書解釈についての講義が収められている。聖書の權威についての論争を詳述し精査しつつ、フォルディは律法と福音の解釈の方法に權威の源泉を主張する。彼は結果として、ELCAを形成する教会において主流となる神学的立場を代表することとなる。

フォルディは、「信仰が真実と主張することが正しいとどうやって知るのか」という疑問に答えようとするときの神学的な方法論を論争の中心とする。⁽¹⁶⁾ もう少し詳しく言えば、問題は次の点に集約する。「神のことは異なったものとし、人間の言葉よりも權威があるとするのは何か。」⁽¹⁷⁾ 一方には、逐語靈感説や聖書無謬説という主張によって答えようとするグループがあり、他方には、律法・福音法によってそうしようとするグループがある。それぞれのグループは、お互いの方法を不十分だとする。⁽¹⁸⁾

逐語靈感説という方法によれば、正統主義神学に従って、聖書は聖霊の三つの働きによって存在するようになった。著者を動かして書かせること *impulsus ad scribendum*、どのような内容を書くかと著者に伝えること *suggestio rerum*、そして実際にどの言葉を使って書くかを著者に与えること *suggestio verborum* である。⁽¹⁹⁾ すでに述べたように「どのように知るのか」という疑問は、相応しい聖書の箇所と言及すること、そして信仰を定義する三つの言葉、知識 *notitia*、同意 *assensus*、信頼 *fiducia* がそれに続くことによって答えられる。⁽²⁰⁾ それはつまり、すでに与えられている權威である。もっと単純に言えば、「聖書の教理がまずあって、それにすべてが従う

のである。⁽⁸¹⁾この理解の有益性を挙げるとすると、極端に単純であり、簡単に理解できるということ、そして聖書の直接的権威の下に人間を置こうとするということである。そしてフォルデイはすぐ不利益性を挙げる。それは(1)先天的な信仰箇条とされた聖書の無謬性は、聖書的な根拠を持たず、つまりは人間による構築物であり、先天的もしくは事前に真実であると知ることも受け入れることもできないということ、(2)「聖書や私たちを取り巻く世界の研究から得られた事実と折り合いをつけることができない」こと、そして(3)理論や人間的な論理に則って、結果としてその運命に苦しまねばならないということである。⁽⁸²⁾

律法・福音の方法は、フォルデイによれば、ルターの神のことばの理解の回復の試みである。キリスト教の真理は、説教においては聞き手に何かが起こるゆえに真実であると証明されるのであって、聞き手が逐語靈感説と聖書無謬性を信じているからではない。この宣教的および実践的洞察は、ルター派神学の全体を支配すべきであるとフォルデイは言う。⁽⁸³⁾この神のことばが説教されるときに聞き手に起きる何かとは何なのだろうか。それは、裁きと贖いにおける生きたことばの行為、つまり律法と福音である。フォルデイは言う。「神のことばは神のことばとして告白される。なぜならそれは、私において信仰を運んでくる律法と福音として働くそのゆえである。それは、この行為における生きた、真のことばとしてそれ自身を顕かにするのである。」⁽⁸⁴⁾次にフォルデイは律法と福音とを定義する。律法とは、人間が信仰なしに出会うすべてのことである。「イエス・キリストがあなたのために死なれた」という言葉さえも、もしそれが聞き手に何を為すべきかだけを問うのであれば律法である。⁽⁸⁵⁾それに対して、福音は、信仰によってのみ聞かれることができる。「それは律法によってその生の終わりへと到達したのだけによって聞かれる。」⁽⁸⁶⁾それは聞き手に約束をもたらし、彼らの命をよい知らせによって花開

かせ、生の完全に新しい領域を開く。福音はルターにとつて、本の中に納めきれず、生きた声によつて宣言されなければならないほどに特別であつた。⁽⁸⁷⁾さらに、信仰はその意味の一つにおいては福音を聞くことの前提であり、同時にしかし、他の意味においては違ふ。なぜなら、聞き手に起こる神の大胆な行為は同時に、神のことばを聞くことにおいても起こるからである。⁽⁸⁸⁾

フォルデイは、逐語靈感説は真実であるとされる教えをどれだけ持つことができるのかと問うことによつて量的に異なろうとするのに対して、神のことばは質的に異なるのだと主張する。⁽⁸⁹⁾フォルデイは、その靈感と誤りに関しての推測を示して、彼の律法・福音法の説明を終える。この方法によれば、神のことばは受肉したことばイエス・キリストである。それはまた、キリストを証する限りにおいて聖書である。そしてまた、説教もまた神のことばである。説教と聖書の違いについて問う者もあるだろう。フォルデイは、質的には両者には何の違いもないと言う。しかし「聖書は元の出来事に近いため、説教を超えた至上の權威である。それはキリストの出来事と本来の目撃者によつてはかられるべきである私たちの言うすべての本来の目撃者である。」⁽⁹⁰⁾さらには、聖書における人間の間違いの存在には、特別な影響力はない。そのためフォルデイは、「神はご自分のことばを私たちに伝えるためにかなり人間的な方法を取られたとしか言うことができない」とする。⁽⁹¹⁾

フォルデイは、律法・福音法の有益性と不利益性を挙げ、聖書の權威に関する論争において何が危機にさらされているかについて語る。ここでは特に、そのうちの二つに触れる。一つは、この方法では、特に歴史批評学的研究や科学、またその他の人間の努力に傾倒せず、福音にのみ専念しているのにも拘らず、人間が世界についての真実を得るために使う他の方法との間に論争を起こさず、また依存しないということである。⁽⁹²⁾もう一つは、そ

の最終的な目的である教会における説教に活力を与える助けになるということである。⁽⁹³⁾

一九六〇年代、LCMS内部にある変化が起きたことについても言及する必要がある。ミズーリ州セイント・ルイスにあるLCMSの神学校でセミネックスSemtex以前及びその最中に教鞭を取っていたエドワード・H・シュローダーEdward H. Schroederが一九六六年にルター派の解釈論について書いた論文のうちにその変化を認めることができる。⁽⁹⁴⁾この論文の中でシュローダーは、改革者たちは確かに完全な逐語霊感説という理解を保持していたが、それを聖書の権威の根拠としてはいなかったし、神のみことばと言うとき、まず第一に聖書を思い浮かべることもなかったと主張する。⁽⁹⁵⁾シュローダーは、ルターが神のみことばと聖書を同じものだとはしていなかったと公の場で認め、さらに、逐語霊感説と聖書の無謬性を聖書の権威の源泉および根拠とすることに對して反論した。論文の最後でシュローダーは、聖書研究における歴史批評の方法論の使用について次のように発言している。「なぜ聖書の研究において原典批評や様式史批評の道具を使い、かつルター派の解釈論の原理に忠実でいられないのかということの先験的な理由はない。⁽⁹⁶⁾」

九 結論 Conclusion

一九七〇年代、LCMSは聖書の権威の問題と聖書研究における歴史批評的方法論の使用に関する問題を巡り分裂した。一九七三年のニューオーリンズ大会で、LCMSは一九三二年の『短い声明』によって説明された逐

語靈感説と無謬説をその聖書理解として採択した。聖書根本主義的な保守的立場の表明は、セイント・ルイスのコンコルディア神学校の校長と四五人の教師陣——その中にシュローターも含まれる——および多数の学生の離脱と、その結果セミネックス *Seminex* (*Seminary in Exile*) として知られる離脱者たちによる神学校の成立を促した。このグループはLCMSから追放されたほかのメンバーを加えて福音ルーテル教会連合 *the Association of Evangelical Lutheran Churches* を形成し、一九八八年のELCA成立時には他のルーター派諸教会と共にそこに加わった。⁽⁹⁷⁾

二〇世紀の初頭、アメリカのルーター派の大多数は聖書の無謬性を支持、もしくは聖書原理主義の立場を取っていた。しかしながら、ヘンリー・アイスター・ジェイコブスのような神学者たちは、注意深く微妙で限定的な無謬性の立場を主張することができた。チャールズ・マイケル・ジェイコブスに代表される、その次の世代の神学者たちは、エアランゲン学派の神学やルーターの研究を通して、聖書原理主義と神のみことばを聖書と同じとする理解を拒んだ。「回復された」ルーターの理解に従う彼らにとって、神のみことばの第一義的な意味はイエス・キリストによって明らかにされた福音であり、結果として、聖書に相応しい權威を与えるものは、キリストを押し出す *Christum treiben* 神の生きたみことばの行為そのものである。この理解は、科学の影響と、聖書研究における歴史批評の果たす役割が急速に増していく世界で生きるアメリカのルーター派の人々を助けた。これは公平な評価ではないかもしれないが、両ジェイコブスや彼らの同時代人、またそれに続く「新ルーター派」の同僚たちは、聖書根本主義者たちが自身とその信仰を世界から分離させていく中、キリスト教の信仰と変化し続けるモダン主義の世界とを和解させようと努力しているような印象を受ける。すでに見たようにその成立においてC・

M・ジェイコブスが重要な役割を果たしたULCAのバルティモア宣言の立場は、その後アメリカのルター派の中で優位を占め、ELCAの今日の聖書理解に今なお続く影響を残している。

近年のルター派聖書解釈の研究において、十字架の神学が注目を集めるようになったことも触れられるべきであろう。神は人間の理性によって最も不在であろうと考えられているところにむしろ臨在するというその理解は、聖書の内容だけでなく、聖書が書かれ成立する過程において弱く、罪深い人間が関わっているということに關してもよく合致する⁽⁸⁸⁾。

神のみことばとは何であろうか。特に聖書との関係において、それは何なのであろう。この問いはすべてのキリスト者、しかし特に牧師に対して問われなければならない。二〇世紀北アメリカのルター派におけるこの問いを取り巻く歴史のこの短い叙述が、日本福音ルーテル教会の同僚たちがこの問いと向き合う際の一助になればと望む。

注

- (1) Eric W. Gritsch, *A History of Lutheranism*, 2nd ed. (Minneapolis: Fortress Press, 2010), 251. 以下、外国語文献の引用については、特に指摘がない限りは著者による私訳。
- (2) ルーテル学院大学・日本ルーテル神学校名誉教授徳善義和氏は、私との会話の中でJELCの聖書理解は新ルター派のそれであると認めている。
- (3) Paul D. Feinberg, "Bible, Inerrancy and Infallibility of," *Evangelical Dictionary of Theology*, ed. by Walter A. Elwell (Grand Rapids: Baker Book House, 1995), 142.
- (4) 徳善義和『宣教百年の歩み：日本福音ルーテル教会宣教百年略史「1893-1993」』宣教百年記念事業室、一九九三年、一三頁。日本福音ルーテル教会の成立をどの時点で見えるかについては、大半が戦前や戦後すぐの時期を思い浮かべるであろう。しかし、ここでは便宜上、聖書の権威と無謬性に関して異なった理解を持つ宣教団体が合同した一九六三年を、現在の日本福音ルーテル教会の実質的な成立、もしくは誕生としたい。
- (5) 徳善義和『宣教百年の歩み：日本福音ルーテル教会宣教百年略史「1893-1993」』、一六―二四頁。
- (6) 岸千年「ブラウン Brown, Charles Lafayette」『日本キリスト教歴史大事典』海老沢有道編、教文館、一九八八年、一二二九頁。田中善一「九州学院」『日本キリスト教歴史大事典』海老沢有道編、教文館、一九八八年、三七―一頁。
- (7) 岸千年「ミラー Miller, Lewis Samuel Godfrey」『日本キリスト教歴史大事典』海老沢有道編、教文館、一九八八年、一三七―六頁。
- (8) 岸千年「ホーン Horn, Edward Trail [sic] Jr.」『日本キリスト教歴史大事典』、海老沢有道編、教文館、一九八八年、一二九―七頁。

- (9) ブラウンについては、ピーリー『ピーリーの日本伝道開始の記録：1892（明治25年）-1899（明治32年）』青山四郎訳、グロリア出版、一九八二年、六二頁。ミラーとホーンについては、福山猛編集『日本福音ルーテル教会史』ルーテル社、一九五四年、八八、一二七頁を参照。
- (10) Henry Eyster Jacobs, *A Summary of the Christian Faith* (Philadelphia: General Council Publication House, 1905), vii.
- (11) James Kenneth Echols, *Charles Michael Jacobs, The Scriptures, and the Word of God: One Man's Struggle against Biblical Fundamentalism among American Lutherans* (Ann Arbor: University Microfilms International, 1991), 7, 18.
- (12) Jacobs, *A Summary of the Christian Faith*, 3.
- (13) Ibid., 8.
- (14) Francis Pieper, *Christian Dogmatics*, vol.1, ed. by Theodore Engelder (Saint Louis: Concordia Publishing House, 1950), 220.
- (15) Ibid., 213.
- (16) C. George Fry and John M. Drickamer, "The Doctrine of Biblical Authority in the Theology of Henry Eyster Jacobs, 1844-1932", *Concordia Theological Quarterly* 44, no.4 (October 1, 1980): 227-228. 註釋は、その記事の執筆意図については、その二二五頁を参照の事。
- (17) Jacobs, *A Summary of the Christian Faith*, vii. Echols, *Charles Michael Jacobs*, 18.
- (18) エコルズは、Introductionの脚注35（二二二頁）でその著書 *Elements of Religion* に言及して、H・E・シェイコプスが無謬性を宗教的メッセージに限定しているものと指摘している。参照：Echols, *Charles Michael Jacobs*, 11-12.

- (19) Echols, *Charles Michael Jacobs*, 26.
- (20) *Ibid.*, 90.
- (21) *Ibid.*, 28.
- (22) *Ibid.*, 38.
- (23) *Ibid.*, 90.
- (24) E. Clifford Nelson, "VI The New Shape of Lutheranism: 1930-," *The Lutherans in North America*, ed. E. Clifford Nelson, rev. ed. (Philadelphia: Fortress Press, 1980), 457.
- (25) *Ibid.*, 457-458.
- (26) *Ibid.*, 458.
- (27) 參照：Echols, *Charles Michael Jacobs*, 29-30.
- (28) Richard C. Wolf, *Documents of Lutheran Unity in America* (Philadelphia: Fortress Press, 1966), 340.
- (29) *Ibid.*, 338-339.
- (30) *Ibid.*, 381-382.
- (31) *Ibid.*, 382.
- (32) *Ibid.*
- (33) *Ibid.*, 380.
- (34) *Ibid.*, 345.
- (35) *Ibid.*, 357.
- (36) *Ibid.*, 359.
- (37) *Ibid.*, 357.

- (38) Theodore G. Tappert, *History of the Lutheran Theological Seminary at Philadelphia 1864-1964* (Philadelphia: Lutheran Theological Seminary, 1964), 100. ヴァンダービーク・C・M・シェイコプスの校長就任演説を引用している。
- (39) Wolf, *Documents of Lutheran Unity in America*, 359.
- (40) Echols, *Charles Michael Jacobs*, 200-203.
- (41) Tappert, *History of the Lutheran Theological Seminary at Philadelphia 1864-1964*, 100.
- (42) Echols, *Charles Michael Jacobs*, 11 (n. 33).
- (43) Ibid., 114.
- (44) Ibid., 112-117 (n. 71 を参照)。
- (45) Ibid., 108.
- (46) Ibid., 108.
- (47) Timothy J. Wengert, *Reading the Bible with Martin Luther* (Grand Rapids: Baker Academic, 2013), 18, 20.
- (48) Echols, *Charles Michael Jacobs*, 108. シェイコプスはいかに「強きある主観性を理由にバルトやリッチェルの聖書理解から自分のそれを区別する」参照 Echols, *Charles Michael Jacobs*, 141 (n. 54).
- (49) Echols, *Charles Michael Jacobs*, 197.
- (50) Nelson, "VI The New Shape of Lutheranism, 1930-," 463.
- (51) Ibid., 463.
- (52) Ibid., 463.
- (53) Ibid., 463.
- (54) Ibid., 458.

- (55) Bernhard Lohse, *Martin Luther: An Introduction to His Life and Work* (Philadelphia: Fortress Press, 1986), 217, 239.
- (56) Ibid., 223.
- (57) Günther Gassmann, "Luther Renaissance," *Historical Dictionary of Lutheranism*, ed. by Günther Gassmann in cooperation with Duane H. Larson and Mark W. Oldenburg (Lanham, MD: The Scarecrow Press, Inc., 2001), 247-248.
- (58) Lohse, *Martin Luther*, 231.
- (59) *Works of Martin Luther with Introduction and Notes* 全六卷。A. J. Holman Company とフィラデルフィアの General Council Publication Board によって、一九一五年から一九三二年の間に出版された。
- (60) Gassmann, "Luther Renaissance," 248.
- (61) Tappert, *History of the Lutheran Theological Seminary at Philadelphia 1864-1964*, 72:「教義学に関しては、一七世紀の正統主義神学者について、ニュートンの著作から抜粋し自分で翻訳したものを使っていた。しかし、一九世紀の終わりにはすべてに、スコラ的な硬直性に辟易し、自身の著作である *Elements*、そして *Summary* を使うようになった。しかしこれらの本も、聖書テキストを無批判的に証拠として挙げるだけでなく、アリストテレス的手法においても、一七世紀のスコラ的方法に則っていたことは言及されなければならない。ジェイコブスは、一九世紀の神学にくく小さい影響しか受けていなかった……。」
- (62) C. George Fry, "The Doctrine of the Word in Orthodox Lutheranism," *Concordia Theological Quarterly* 43, no. 1 (January, 1979), 29.
- (63) Ibid., 29.
- (64) 参照。The Synodical Centennial Committee, forward to Pieper, *Christian Dogmatics*, v-vii.

- (65) Nelson, "VI The New Shape of Lutheranism, 1930-," 457.
- (66) Gassmann, "Luther Renaissance," 248.
- (67) Nelson, "VI The New Shape of Lutheranism, 1930-," 463.
- (68) Joseph Sittler, *Doctrine of the Word in the Structure of Lutheran Theology* (Philadelphia: The Board of Publication of the ULCA, 1948), 34.
- (69) Ibid., 35.
- (70) Ibid., 34-35, 48.
- (71) Ibid., 49-50.
- (72) ルター派正統主義神学の再評価の試みに「ついで」を参照。Robert D. Preus, *Theology of Post-Reformation Lutheranism: A Study of Theological Prolegomena* (Saint Louis: Concordia Publishing House, 1970). ヘルパーの著作の主張については、次を参照。William F. Orr, "Doctrine of the Word in the Structure of Lutheran Theology," *Theology Today* 8 no.2 (July 1, 1951): 264-265.
- (73) Sittler, *Doctrine of the Word in the Structure of Lutheran Theology*, 50.
- (74) Robert W. Jensen, "A Theological Autobiography, to Date," *Dialog* 46, no.1 (Spring, 2007): 49.
- (75) Ibid., 50.
- (76) Gerhard Forde, "Law and Gospel as the Methodological Principle of Theology," *Theological Perspectives: A Discussion of Contemporary Issues in Lutheran Theology*, Members of the Department of Religion, Luther College (Decorah: Luther College Press, 1964), 50-51.
- (77) Ibid., 51.
- (78) Ibid., 51-52.

- (79) Ibid., 54.
- (80) Ibid.
- (81) Ibid.
- (82) Ibid., 54-57. 下の三つ目の不利な点について、グリッチはネルソンを引用して次のように言う。「五〇年遅滞したルター派の一致は、最終的には起るであろう。なぜなら、ミズーリは自身の信仰告白の意味するところから逃げることをせざるを得ない。」参照: Gritsch, *A History of Lutheranism*, 252.
- (83) Forde, "Law and Gospel as the Methodological Principle of Theology," 59-60.
- (84) Ibid., 61.
- (85) Ibid., 62.
- (86) Ibid., 63.
- (87) Ibid.
- (88) Ibid.
- (89) Ibid., 53-54, 63-64.
- (90) Ibid., 64-65.
- (91) Ibid., 65.
- (92) Ibid., 66-67.
- (93) Ibid., 68.
- (94) The ELCA, "Edward H. Schroeder," *The Lutheran*. http://www.thelutheran.org/about/person_detail.cfm?person_id=1259 (accessed November 2, 2013).
- (95) Edward H. Schroeder, "Is There a Lutheran Hermeneutics?," *The Lively Function of the Gospel*, ed. by Robert W.

Bertram (Saint Louis: Concordia Publishing House, 1966): 84.

(96) Ibid., 97.

(97) Ibid., 253.

(98) 参照。Wengert, *Reading the Bible with Martin Luther*, 50-53.

参考文献

- 岸千年「ブラウン Brown, Charles Lafayette」『日本キリスト教歴史大事典』海老沢有道編、教文館、一九八八年。
——、「ホーン Horn, Edward Trail [sic] Jr」『日本キリスト教歴史大事典』海老沢有道編、教文館、一九八八年。
——、「ミラー Miller, Lewis Samuel Godfrey」『日本キリスト教歴史大事典』海老沢有道編、教文館、一九八八年。
田中善一「九州学院」『日本キリスト教歴史大事典』海老沢有道編、教文館、一九八八年。
徳善義和『宣教百年の歩み：日本福音ルーテル教会宣教百年略史、1893-1993』宣教百年記念事業室、一九九三年。
ピーリー『ピーリーの日本伝道の記録：1892（明治25年）-1899（明治32年）』青山四郎訳、グローリア出版、1982年。
福山猛編纂『日本福音ルーテル教会史』ルーテル社、一九五四年。

The Augsburg Confession (German Text). Robert Kolb and Timothy J. Wengert, eds. *The Book of Concord: The*

Confessions of the Evangelical Lutheran Church. Minneapolis: Fortress Press, 2000: 27-105.

Bohlmann, Ralph A. "Confessional Biblical Interpretation: Some Basic Principles." *Studies in Lutheran Hermeneutics*.

Ed. by John Reumann. Philadelphia: Fortress Press, 1979: 189-213.

Bultmann, Rudolf. "New Testament and Mythology (1941)." *New Testament and Mythology and Other Basic Writings*.

Ed. and Trans. by Schubert M. Ogden. Philadelphia: Fortress Press, 1984: 1-14.

_____, "On the Problem of Demythologizing (1952)." *New Testament and Mythology and Other Basic Writings*. Ed. and Trans. by Schubert M. Ogden. Philadelphia: Fortress Press, 1984: 95-130.

Division of Theological Studies, the. *Statement on Historical Criticism*. Lutheran Council in the USA. New York: Lutheran Council in the USA: Publication Year Unknown.

Echols, James Kenneth. *Charles Michael Jacobs, The Scriptures, and the Word of God: One Man's Struggle against Biblical Fundamentalism among American Lutherans*. Ann Arbor: University Microfilms International, 1991.

ELCA, the. *Constitution, Bylaws, and Continuing Resolutions of the Evangelical Lutheran Church in America*.

_____, "Edward H. Schroeder." *The Lutheran*. http://www.thelutheran.org/about/person_detail.cfm?person_id=1259 (accessed November 2, 2013).

Feinberg, Paul D. "Bible, Inerrancy and Infallibility of." *Evangelical Dictionary of Theology*. Ed. by Walter A. Elwell. Grand Rapids: Baker Book House, 1995.

Forde, Gerhard. "Law and Gospel as the Methodological Principle of Theology." *Theological Perspectives: A Discussion of Contemporary Issues in Lutheran Theology*. Members of the Department of Religion, Luther College. Decorah:

- Luther College Press, 1964: 50-69.
- Fry, C. George. "The Doctrine of the Word in Orthodox Lutheranism," *Concordia Theological Quarterly* 43, no. 1. (January, 1979): 26-44.
- Fry, C George, and John M. Drickamer. "The Doctrine of Biblical Authority in the Theology of Henry Eyster Jacobs, 1844-1932." *Concordia Theological Quarterly* 44, no. 4. (October 1, 1980): 224-233.
- Gassmann, Günther. "Luther Renaissance." *Historical Dictionary of Lutheranism*. Ed. by Günther Gassmann in cooperation with Duane H. Larson and Mark W. Oldenburg. Lanham, MD: The Scarecrow Press, Inc., 2001: 247-248.
- Grenz, Stanley J., and John Franke. "Chapter Three. Scripture: Theology's 'Norming Norm.'" *Beyond Fundamentalism: Shaping Theology in a Post-Modern Context*. Louisville: Westminster, 2001: 57-92.
- Gritsch, Eric W. *A History of Lutheranism*. 2nd ed. Minneapolis: Fortress Press, 2010.
- Jacobs, Henry Eyster. *A Summary of the Christian Faith*. Philadelphia: General Council Publication House, 1905.
- Jenson, Robert W. "A Theological Autobiography, to Date." *Dialog* 46, no.1 (Spring, 2007): 46-54.
- Kolb, Robert. *Luther and the Stories of God: Biblical Narrative as a Foundation for Christian Living*. Grand Rapids, MI: Baker Academic, 2012.
- Lohse, Bernhard. *Martin Luther: An Introduction to His Life and Work*. Philadelphia: Fortress Press, 1986.
- Lotz, David W. "Luther on Biblical Authority." *Encounters with Luther: Lectures, Discussions and Sermons at the Martin Luther Colloquia, 1975-1979*. Vol.2. Dir. by Eric W. Gritsch. Gettysburg: Lutheran Theological Seminary at Gettysburg, 1982: 127-143.
- Marquart, Kurt E. "Incompatibility between Historical-Critical Theology and the Confessions." *Studies in Lutheran Hermeneutics*. Ed. by John Reumann. Philadelphia: Fortress Press, 1979: 313-333.

- Nelson, E. Clifford. "VI The New Shape of Lutheranism: 1930-." *The Lutherans in North America*. Ed. by E. Clifford Nelson. Revised ed. Philadelphia: Fortress Press, 1980. 451-541.
- _____. "Suppliment." *The Lutherans in North America*. Ed. by E. Clifford Nelson. Rev. ed. Philadelphia: Fortress Press, 1980. 558-564.
- Orr, William F. "Doctrine of the Word in the Structure of Lutheran Theology." *Theology Today* 8 no.2 (July 1, 1951): 264-265.
- Peery, Robert B. *Peery-no Nihon Dendou Kaishi-no Kiroku: 1892 (Meiji Era 25)-1899 (Meiji Era 32)*. Trans. by Shirou Aoyama. Tokyo: Gloria Shuppan, 1982.
- Pieper, Francis. *Christian Dogmatics*. Vol.1. Ed. by Theodore Engelder. Saint Louis: Concordia Publishing House, 1950.
- Preus, Robert D. *Theology of Post-Reformation Lutheranism: A Study of Theological Prolegomena*. Saint Louis: Concordia Publishing House, 1970.
- Schroeder, Edward H. "Is There a Lutheran Hermeneutics?" *The Lively Function of the Gospel*. Ed. by Robert W. Bertram. Saint Louis: Concordia Publishing House, 1966. 81-97.
- Sittler, Joseph. *Doctrine of the Word in the Structure of Lutheran Theology*. Philadelphia: The Board of Publication of the ULCA, 1948.
- Synodical Centennial Committee, the. "Forward." *Christian Dogmatics*. Vol.1. Author: Francis Pieper. Ed. by Theodore Engelder. Saint Louis: Concordia Publishing House, 1950.
- Tappert, Theodore G. *History of the Lutheran Theological Seminary at Philadelphia 1864-1964*. Philadelphia: Lutheran Theological Seminary, 1964.
- Wengert, Timothy J. *Reading the Bible with Luther*. Grand Rapids, MI: Baker Academic, 2013.

Wolf, Richard C. *Documents of Lutheran Unity in America*. Philadelphia: Fortress Press, 1966.